

## 伊吹山放牧場

伊吹山麓の上野・伊吹・太平寺の人々は、江戸時代中頃から田畠の肥料や牛の飼料のために伊吹山の山頂まで草刈り(採草)をおこなっていました。これは昭和30年代前半まで続きますが、戦後の農産業復興の中で、草刈場が多く豊富な飼料が得やすかった伊吹地域では、県により酪農の普及育成が図られました。昭和24年には上野区に牛乳処理場が建設され、伊吹牛乳が誕生します。また、昭和26年5月、伊吹山2合目あたりに「県立伊吹山家畜放牧場」も新設され、乳牛や山羊、鶏などが放牧されて、登山客にも親しまれるようになりました。

しかし、順調に進んでいた伊吹山での放牧ですが、昭和30年ごろより吸血ダニの被害が増大し、昭和32年度にやむなく中止せざるを得なくなります。今では想像もつきませんが、戦後間もない頃、伊吹山で

は大自然の中、牛や山羊たちがのびのびと過ごしていました。(伊吹自治センター情報誌の文章に一部加筆)



▲放牧場(絵はがき)

## 情 報 BOX

◆米原市教育委員会では、下記の図録を発行しました。  
『湊・舟、そして湖底に沈んだ村』  
※3月に開催した企画展の図録です。

◆米原市教育委員会では、下記の資料集を発行しました。  
『新視点・山寺から山城へ—近江の戦国時代—』  
(米原市埋蔵文化財活用事業)  
※10月におこなった「第4回 山寺サミット」のレジメと近江の寺院城郭37カ所を収録しています。

◆米原市教育委員会では、下記のマップおよびリーフレットを作成しました。  
『米原市遺跡散策マップ3 湖の遺跡・山の遺跡』  
『米原市遺跡リーフレット』(13~22)  
13下丹生古墳、14磯崎古墳群、15磯山城遺跡、16磯山城跡、17入江内湖遺跡、18筑摩御厨遺跡、19尚江千軒遺跡、20朝妻湊跡、21米原湊跡、22朝妻城跡

◆中川泉三没後70年記念展実行委員会(事務局/米原市教育委員会)では、下記の図録を刊行しました。

『史学は死學にあらず』  
※県内の多くの郡志編纂に携わった、米原市大野木出身の郷土史家・中川泉三の業績を紹介しています。

◆米原市伊吹山文化資料館では、下記の冊子を発行しました。  
『伊吹山文化資料館年報11 平成20年度の活動』  
※地元の春照地区と取り組んだ「野仏探検隊」などの活動も紹介しています。

◆米原市伊吹山文化資料館では、下記のパンフレットを作成しました。  
『春照区の野仏ガイドマップ』  
※子どもたちと取り組んだ石仏調査をまとめました。

## ◆◆編集後記◆◆

「佐加太」30号をお届けします。今回はいろいろな話題を取り上げました■実は米原市では、ここ二年ほど遺跡の本調査がありません。三年間掘った京極氏遺跡の整理作業をぼちぼちやっています■だから、発刊当初に紙面をにぎわしていた埋蔵文化財の話題がなかなかないのが現実です■市も県も財政が逼迫していて確認のための調査が、当分できそうにもありませんし…■と、いうことで今回の佐加太にも、新しい埋蔵文化財の話題を盛り込めませんでした■広い市内ですからネタを探すのには困りませんが、なかなか原稿をうつ氣力がわからなくて…■ネタのタネあかしをすると、今回の原稿は広報『まいばら』の連載シリーズ「米原歴史街道」に手を加えて掲載しました■広報は市民向けの情報紙で、「佐加太」は発行当初からどちらかと市外の皆さん向けの米原の文化財を紹介する一面をもっています■「あれ、どこかで読んだなあ」と思われた市民の皆さま。編集者のサボリをひらにお許しください■縄文から石切場まで、色々な遺跡の調査速報が出来る日まで(山ノ神)

## 米原市文化財ニュース

### 佐 加 太 第30号

発 行 平成21年12月21日  
編 集 米原市教育委員会  
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地  
米原市教育委員会まなび推進課  
TEL.0749(55)8106 FAX.0749(55)4040  
印 刷 ビッグバードデザイン株式会社



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

## 五色の滝は石切り場

米原市有数の美しい滝・五色の滝は、地元曲谷のみなさんの手で散策ルートや滝の周辺が整備されて、簡単なトレッキングの装備さえあればいつでも散策できます。巨大な花崗岩の岩塊が露頭して、急峻な渓谷に折なしで作り出す数段の滝は、それぞれの景色が違って、まさに「五色」の滝と呼ばれるゆえんです。

すでに行かれた方はご存じだと思いますが、メインの滝の周辺には、人工的に割られた円形や半円形の花崗岩が点在しています。また、石が四角く積まれた空間があり、下流の滝へ向かう遊歩道沿いにも五カ所くらい見られます。これは、石の加工場「石屋」です。現地の看板にあるように、ここは滋賀県内でも珍しい石切り場の遺跡なのです。よく観察すると、方形にはつられた岩や、割るときに「ヤ」と呼ばれるノミを等間隔に打ち込んだ跡が見られます。

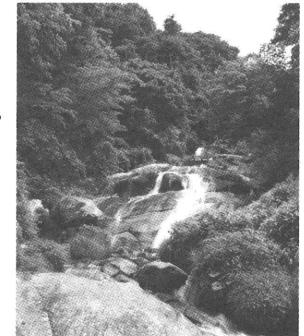
伊吹といえば、かつてセメント産業を支えた石灰岩を思い浮かべますが、吉根や曲谷から奥伊吹一帯は花崗岩地帯になっています。曲谷では、五色の滝周辺など集落背後の山中に三カ所の石切り場があり、また、集落内を流れる姉川の転石を利用した石材加工がおこなわれていました。「上流の甲津原の石はやらかすぎ。下流の吉根の石はかたすぎ。曲谷の石がちょうどいい」。中世には石塔や石仏が、江戸時代には石臼が生産品の中心です。

さて、曲谷の円楽寺に、石臼作りを伝えたという西仏房さんの石像があります。1129年頃、信濃國(長野県)の豪族・海野一族の子として生まれ、奈良興福寺の僧になりますが、ときの権力者平清盛への反乱に加担して追われます。その後、覚明と名前を変え、文筆の才を認められて木曾義仲の書記官になります。しかし、木曾義仲は栗津で源義經に敗れ、覚明は姉川奥深くに逃げました。このとき、曲谷で石の加工に適した花崗岩を見つけ、ふるさとから石工をよんで石臼作りを伝えたといいます。日本の石材加工技術は、凝灰岩などの軟質の岩石については古墳の石の棺など古くから利用されていますが、硬

第30号

2009年12月21日

滋賀県米原市教育委員会



▲五色の滝



▲石屋跡

## 【市指定無形民俗文化財】鍋釜祭（鍋冠祭）

—近江なる 筑摩のまつり とくせなむ つれなき人の 鍋のかず見む—

『伊勢物語』に詠まれた筑摩の祭は、平安貴族にも広く知られていました。鍋釜祭といわれ、筑摩神社の春の祭礼として、毎年5月3日におこなわれます。鍋冠りは7~8才の少女8人が一閑張りの鍋や釜を冠り、緑の狩衣に縫いの袴をつけた雅やかな姿で、湖北に春をつげます。筑摩神社の祭神のひとつに朝廷の料理を担当する大膳職が祀る御食津神があり、筑摩の神は食物の神です。

筑摩には、古代から中世にかけて、朝廷や有力社寺へ食物を調達する機関である「御厨」がありました。近江では瀬田・和邇(大津市)、筑摩に置かれました。筑摩御厨の最も古い文献は延暦19年(800)の太政官符で(『類聚三代格』)、宮内省大膳職から内膳司に移管されたことが書かれていますが、その成立は奈良時代までさかのぼるようです。御厨推定地近くの湖岸の発掘調査では、小面積ながらたくさんの墨書き土器が出土し、刀子(ナイフ、字を書く木の札を削る文具)、硯、緑釉陶器、皇朝十二銭のひとつ「神

功開宝」など、8世紀末~9世紀(平安時代初期)の役所で使うような遺物が見つかり、筑摩御厨のものと判断されました。鍋冠祭は、御厨のようすを映した姿といわれます。

(高橋順之)



▲鍋釜祭

## 『史学は死学にあらず』～中川泉三の生涯～

中川泉三は、明治2年に現米原市大野木に生まれました。大正2年に編さん責任者として携わった『近江坂田郡志』が完成します。その高い学術性が評価され、東京帝国大学(現東京大学)史料編纂掛をして、地方史の調査編さんの手本と言わしめました。その結果、泉三は『近江蒲生郡志』・『近江栗太郡志』・『近江愛智郡志』・『近江日野町志』編さんなど次々と依頼を受けることになります。

これら泉三著作の高い学術性の陰には、近代的な日本史学の生みの親と言える久米邦武、東京帝国大学の渡辺世祐、それに京都帝国大学の三浦周行など、当代一流の歴史学者との交友があったからでした。

一方、泉三は各地の郡志編さんだけでなく、歴史学による地域貢献の活動も熱心に行いました。古文書の調査や保存への取り組みはもちろん、各地での人物顕彰にも関与、寺社の由緒調査を行い、その復興・整備の事業への協力を惜しませませんでした。地方史研究の必要性を説いた多くの講演会も開催しています。

昭和14年10月、泉三資料の収蔵庫兼書斎として「章斎文庫」が設立されます。残念ながら設立の2ヶ月後に泉三はこの世を去るのですが、文庫は泉三の

子孫によって現在も受け継がれ、その収蔵資料は実に5万点に及ぶと言われています。

現代に生きる私たちも、泉三が残した資料などを活かしながら歴史学による地域貢献の在り方を考え、熱い思いで実践して行こうと思います。

本年は、泉三が没して70年を迎えることから、泉三が編さんした郡志ゆかりの地にある県内五館が共同し、中川泉三の業績を振り返ろうと展覧会を開催しました。(解説図録は裏面情報BOX参照)

(桂田峰男)



▲中川泉三ラジオ講演風景

## 青岸寺庭園三尊石の修理報告

国指定の名勝青岸寺庭園(米原)は、江戸時代初期に造られた築山林泉式の枯山水庭園で、空池を設け、蓬莱島を作り、枯滝を組む姿は山水画を思わせます。とくに梅雨の頃は、空池内の水を現わして密生する苔の緑が露に濡れて美しく輝き、秋の紅葉とともに庭園の鑑賞にはもってこいの季節です。

客殿から池をはさんで正面奥に立つ三尊石は、この庭園を見るときの中心となる景観です。昨年の二月、三尊石の左側の脇石が倒壊しているとの連絡がありました。現地で確認すると、庭園内のあちこちがモグラによってかなり土壌が緩んでいます。倒壊の直接の原因は積雪によるものですが、獣害やもともとの石の設置状況など、複数の原因が考えられました。また、三尊石の中心である主石も大きく前に傾いている状況で、これは、背後に生えている樹木(モッコク)の根によるものと思われました。

青岸寺は南北朝時代の延文年中(1356~60)、近江の守護大名京極尊誉によって創建されました。当時は太尾山米泉寺とよばれる京極氏の祈願寺でした。境内の湯谷神社は鎮守社であり米原村の産土神です。文明年間(1496~87)、荒廃していた米泉寺は米原氏により再興されましたが、永正年間(1504~21)の

初めに兵火で焼失し、小堂のみ建立されました。慶安三年(1650)、井伊氏の援助で曹洞宗の寺院として復興され、寺号を吸湖山青岸寺に改められました。庭園については三世興欣が彦根城玄宮樂々園の作庭をおこなった香取氏に依頼して完成させたものといわれています。

三尊石の修復作業は、まず庭園全体の測量により平面図を作ることからはじまりました。これまで昭和12年の実測図しかなく、今後の保存管理を図るうえで基礎となる資料です。その後、三尊石がのる築山を構成する土質、石の設置状況、石にいたずらしている背後のモッコクの根の状況等を発掘調査で確認して、復元の根拠を探りました。その結果、①三尊石の大きさに対し立地する築山の土が軟らかいこと、②各石は埋設されてなく下端が築山に乗っているだけであること、③石の背面は礫などで裏込めされているものの簡易なもので石の重量に耐えられないこと、④モッコクが過度に成長し各石に影響していることが倒壊の原因と考えされました。

また、発掘調査で本来主石を支えていた根石が出土したことから、二つの石の隙間に分だけ立て直しました。完全に倒れていた左の脇石は、据え付け時の痕跡に合わせて立て、前後に根石を置いて安定させました。こうして、いまから約330年前の姿に復元されました。ぜひ一度、足をお運びください。

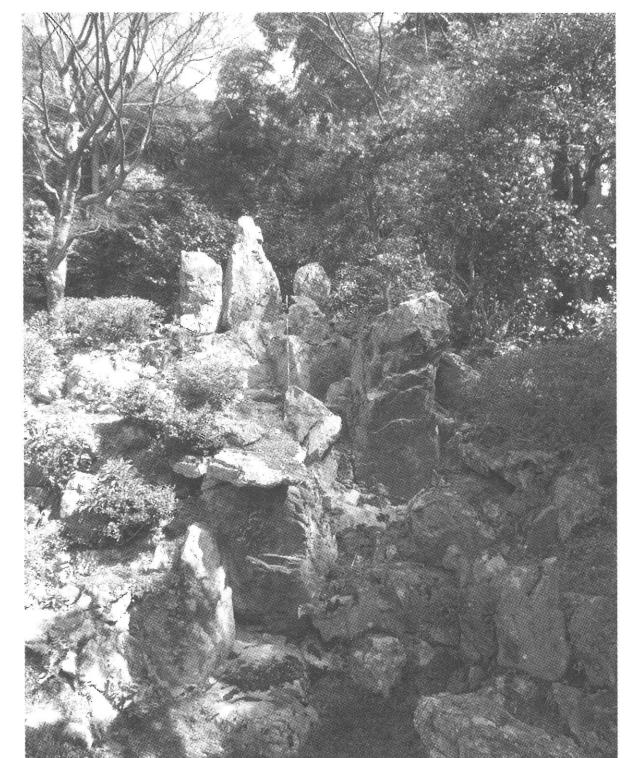
(高橋順之)



▲青岸寺庭園



▲倒壊状況



▲竣工